



八月号



平成24年 8月発行 第18号

白金蔭月例句会案内

・九月二十一日(金) 12:00 ~ 15:00 アビスタ

(第一和室) 兼題 鈴虫、撫子

・十月十九日(金) 12:00 ~ 15:00 アビスタ(第3学習室)

兼題 稲架、体育の日

・十一月十六日(金) 12:00 ~ 15:00 アビスタ(第4学習室)

兼題 初時雨、茶の花。十一月28日(水) 銀座句会。

兼題の参考句 (九月二十一日分 (鈴虫、撫子))

人恋ふや鈴虫の声透きとほり
耳をもつ壺鈴虫は鳴くために
金箔のかくも薄しも鈴虫鳴く
鈴虫の甕が置かれて昼と夜
鈴虫の髭ゆらゆらと町長室
鈴虫の鳴くやニタ鈴三鈴半
鈴虫のこゑ球体をまはしをり
なでしこは母のやさしさ雲遊ぶ
酔て寝むなでしこさける石の上
撫子にふんどし干すや川あがり
撫子のふし／＼にさす夕日哉
靴の火山灰秋なでしこにふりこぼす
撫子に跼めば悪女とも見えず

會澤榮子
大石壽美
榎本愛子
齊藤美規
太田好子
佐藤洋子
小檜山繁子
安富耕二
松尾芭蕉
松倉風蘭
夏目成美
篠田悌二郎
遠藤陽子

月例句会報(12 / 8 / 15 蓮見舟吟行 11名欠3名)

飯田孝三

炎昼の鋪石を擦りてや犬の腹
船頭の白髪ふえたる日焼かな
沼尻やとんぼ集まる敗戦忌
猪牙舟の着くさぐわぐわ牛蛙
釈迦牟尼は眼切れ長蓮咲く
萍にふち取られたる家鴨かな
蓮叢のぐるぐる廻る象鼻杯
日翳りて鵜の嘴しろき沼辺かな
噺れし鳥過ぎてゆく終戦日
たまさかに遇ひし蝗が我を見る
蓮の花みな仰向きて終戦日

増田陽一

増田悦子

水門を過ぎて早稲の田開けたる
青鷺の眠りをさます蓮見舟

光成高志

敗戦の日を遠くして蓮見舟
八月の雲水神の森暗く
鯉はねる音稔田の続きをり

雪加鳴く手賀の田圃と手賀川と

倉田紀子

青鷺の飛び立つ杭の少し揺れ

小鯔刺水面打つか敗戦日

舷に蓮の花来る終戦日

潜望鏡の形して蓮の台立つ

光みち

リフォームの話となりぬ心太
母好む金平糖も盆の菓子
胸底にオルガンの鳴る原爆忌
蓮船の進むおとぎの国へかな
肖像の祖父の鬚終戦日

廃品の中に風呂釜敗戦日

嘉悦羊三

藪枯らし鳥獣保護区と標立つ

石ころの音なく落ちる蟬の穴

白雲を覆ふ黒雲終戦日

たつぷりと水飲む八月十五日

吉羽多美子

菱喰の湖や近江の隠れ里
撫子やイレブンかける草の原
鈴虫の飼はれて籠の小宇宙
山降りる鶉や穂草に来ては去ぬ
座布団をはみ出す膝や蓮見舟

がまの穂やもぐり上手な鳩

対岸の暮しそれく、蓮見舟

猪牙舟に触れ連弁の外れたり

佐藤宏之助

完全にエンジン止め蓮を見ず

一穂の稗なし早稲は穂を垂らす

葦切が葦原に鳴く敗戦日

鵜の速と水上バイク速同じ

田宮敦子

蓮わけてまた蓮の花蓮見船

雲間より光を集め蓮開く

水門の錆著し敗戦忌

青鷺の影大かり手賀の沼

早稲の香や手賀沼の風吹きそめぬ

杉浦弥栄子

水門の向う手賀沼赤とんぼ

放射能心配しても稲稔る

廃船を沈めて漁礁蜻蛉飛ぶ

月見草船頭一人舟にをり

仲本晃司

笠森の夏の本立に鐘渡る

草野球背に降りしきる蝉時雨

船揺れて葉は顔を打つ蓮見かな

境内は人まばらに酷暑なる

暗闇の坂登りきり蝉時雨

松村幸一

蓮の葉の顔たたきゆく舳先かな

吾へ向く蓮八月十五日

小屋中の魚拓が笑ふ蓮見かな

手賀沼の雲大かり蓮見舟

舟中の蓮の実談議かまびすし

釜田敬司

八月十五日の蓮を凡に見ず

舳に迫る花を躲して蓮見舟

ふえてくる靄の花数蓮見舟

青き香の蓮を撓めて蓮の酒

蓮酒を阿片患者のごとく嘔む

1 水門を過ぎて早稲の田開けたる
 2 蓮酒を阿片患者のごとく嚙む
 3 青鷺の飛び立つ杭の少し揺れ
 4 たつぷりと水飲む八月十五日
 5 がまの穂やもぐり上手な鴉
 6 蓮の葉の顔たたきゆく舳先かな
 7 釈迦牟尼は眼切れ長蓮咲く
 8 敗戦の日を遠くして蓮見舟
 9 月見草船頭一人舟にをり
 10 舳に迫る花を躲して蓮見舟
 11 水門の向う手賀沼赤とんぼ
 12 廃品の中に風呂釜金敗戦日
 13 たまさかに遇ひし蟻が我を見る
 14 母好む金平糖も盆の菓子
 15 手賀沼の雲大きかり蓮見舟
 16 船頭の白髪ふえたる日焼かな
 17 沼尻やとんぼ集まる敗戦忌
 18 廢船を沈めて漁礁蜻蛉飛ぶ
 19 一穂の稗なし早稲は穂を垂らす
 20 青鷺の影大きかり手賀の沼
 21 吾へ向く蓮八月十五日
 22 座布団をはみ出す膝や蓮見舟
 23 雪加鳴く手賀の田圃と手賀川と
 24 青き香の蓮を撓めて蓮の酒
 25 青鷺の眠りをさます蓮見舟

悦子 幸一 高志 羊三 昊司 敬司 宏之助 敦子 〃 孝三 昊司 紀子 陽一 みち 敦子 幸一 多美子 多美子 多美子 多美子 幸一 悦子

1 対岸の暮しそれぞれ蓮見舟
 終戦日今年も船で迎へけり
 石ころの音なく落ちる蟬の穴
 1 日翳りて鵜の嘴しろき沼辺かな
 山降りる鶺鴒や穂草に来ては去ぬ
 1 胸底にオルガンの鳴る原爆忘
 1 嘆れし鳥過ぎてゆく終戦日
 船揺れて葉は顔を打つ蓮見かな
 1 水門の錆著し敗戦日
 藪からし鳥獣保護区と標立つ
 1 肖像の祖父の鬚終戦日
 暗闇の坂登りきり蟬時雨
 1 八月十五日の蓮を凡に見ず
 放射能心配しても稲稔る
 1 雲間より光を集め蓮開く
 1 蓮わけてまた蓮の花蓮見船
 1 鵜の速と水上バイク速同じ
 葦切が葦原に鳴く敗戦日
 リフォームの話となりぬ心太
 鯉はねる音稔田の続きをり
 ダックスフントの腹が贅擦るみいんーみんな
 舟中の蓮の実談議かまびすし
 潜望鏡の形して蓮の台立つ
 菱喰の湖や近江の隠れ里
 撫子やイレブンかける草の原
 境内は人まばらに酷暑なる
 舷に蓮の花来る終戦日

多美子 敦子
 陽一 紀子
 羊三 陽一
 敬司 弥栄子
 みち 紀子
 幸一 弥栄子
 敬司 紀子
 高志 孝二
 高志 孝二
 弥栄子 多美子
 高志 孝二
 高志 孝二
 弥栄子 多美子

八月の雲水神の森暗く
蓮の花みな仰向きて終戦日
小鯨刺水面打つか敗戦日
小屋中の魚拓が笑ふ蓮見かな
蓮見舟着くさのぐわと牛蛙
完全にエンデン止め蓮を見ず
ふえてくる靄の花数蓮見舟
草野球背に降りしきる蟬時雨
鈴虫の飼はれて籠の小宇宙
蓮船の進むおときの国へかな
笠森の夏の木立に鐘渡る
早稲の香や手賀沼の風吹きそめぬ
猪牙舟に触れ連弁の外れたり
蓮叢のぐるぐる廻る象鼻杯
白雲を覆ふ黒雲終戦日
萍にふち取られたる家鴨かな

一句鑑賞

八月十五日の蓮を凡に見ず

八月十五日はお盆、家々は祖霊を向かえ供養する、
そして、はしなくも負け戦を止めた日である。葭衆は、
例年、その日を期し手賀沼を蓮見舟で吟行する。掲句は
同舟上での吟。目交、ゆめ疎かな気持ちで蓮を見まじ、
との思いを改めて諾うのである。そして遙かに、戦塵に
散り、戦火に斃れた数多の同胞を偲ぶ。「凡に見ず」の悼

多美子

悦子

高志

昊司

孝二

宏之助

幸一

弥栄子

羊三

紀子

敬司

宏之助

陽一

陽一

陽一

飯田孝三

幸一

みは深く、重い。

母好む金平糖も盆の菓子

紀子

お盆、先年亡くなった母の御霊もお迎えする。ご供物
には、生前好きだった金平糖が欠かせない。「母好む」は
現在形、母さんを目の前にしているわけである。「いつで
も母は心の中に生きている」、その思いがたと口をついた
のだ。「指なめて母は万能桃の花（和生、凡そ男は母に
弱いが、母を慕う気持ちに男女の別はないのだ。「母好み
し」では追慕を出ない。え、分からない？お主、文法の先
生をされても、詩人にやちよと無理でなも。

噺れし鳥過ぎてゆく終戦日

陽一

噺れた鳴声をたて、鳥が空をよぎる。「噺れし」は嘆き、
悲しむ心の謂い。遠く、敗戦の日の悲嘆を振り返り、過
ぎ去つた日月をふと辿る。『て』の氣息が絶妙である。
仮に『が過ぎゆく』だと、ただ囁目の景色、寂々の胸裡
は見えない。戦に敗れた悲しみは、沈潜し、消えない。は
からずも、そう気づかせられる。「敗戦日」ならぬ「終戦
日」の抑憤が思いを深める。

水門を過ぎて早稲の田開けたる

悦子

淡々と囁目の景色を詠んで、心に響く。上五中七の調
べは、滑らか、眼前に水門の広景を繰り伸べ、一転、中七
末から下五に継ぐ、『タヒラケタル』とa音を畳む韻さ
は、突然、目に入る早稲田の稔りへの驚きそのものである。

加えて、これに前者の音踏韻の爽快と後で、r, k音の弾みが相乗する。巧まず平談して、情趣が深い。『早稲田の』ならぬ『早稲の田』の切字効果を見逃せない。『たる』の情懷もまた。

たつぷりと水飲む八月十五日

みち

近年の異常気象は、今夏、殊更ひどく、極暑の連日だ。各地で熱中症が多発、公私の情報がその予防を呼び掛ける。努々、水分摂取を怠るまいぞ。まずは「たつぷりと水を飲む」。今日は八月十五日、ふつと、遠い敗戦の日の「渴き」を思いやる。その切実の記憶が、俄かに、よみがえるのである。

ふえてくる靄の花数蓮見舟

光成高志

幸一

句会では選ばなかったが、後でよく読むと、蓮見舟の当日の情景がよく見えてきたので、ここに鑑賞した。「靄の花数」とは、靄がかかった蓮叢の中に舟が入るにつれ、増えてくる蓮の花の数を表現したものだ。「数ある中に」の用例のように、この数は、多数の意味である。省略の効いた言葉は、よく噛み砕くと味わいが出てくる。中七までは、感動を伝える倒置法だ。「蓮見舟靄の花数ふえてくる」と、順に置いた場合と比較すれば、感動の出所がよくわかる。選外となったのは、靄の捉え方の感性に強弱があったからであろう。私は、象鼻杯に夢中になつていて、

舟外に目を遣る暇がなかった。

放射能心配しても稲稔る

敦子

昨年の福島原発事故は、わが国未曾有の放射能汚染に見舞われ、いまだ終息とはなっていない。三郷の辺の今年米は放射能は検出されなかったと報道にあった。沼尻以東の手賀田圃も同じらしい。我孫子の丘陵地にある野菜は、皆べくレルは安全である。これは、私も計測してもらったので安心されたい。作物を作っているとよくわかることだが、掲句のとおり、放射能を心配しても、稲はお構いなく稔るものです。稲はホンとに強い。

敗戦の日を遠くして蓮見舟

多美子

今年は敗戦から六十七年目になる。掲句の通り、敗戦の日を遠くしてゆくばかりである。その敗戦日に蓮見舟の舟上にある己を見つめているひととき、誰もが同じ時間を感じたことでしょう。終戦記念日に蓮見舟を出して七年目である。敗戦日と蓮見の取合せの究極はどこにあるのかと前報に書きましたが、その行方を普遍的に言い当てているのです。

一穂の稗なし早稲は穂を垂らす

宏之助

稗は稲より高く育ち、その穂は稲より浅黒く目立つので、稲田に稗があつたら直ぐわかる。こうなる前に、青田に入つて稗を抜かねば掲句のような美しい早稲田にはなりません。農夫は、青田を這いずり回つて稗を抜くの

です。現在は、田植機が雑草除けの農薬を撒きながら、田を植えているようです。「一穂の稗なし」が、黄金に稔る早稲田を想像させ、更によく見て、「穂を垂らす」と的確に描写している誓子直伝正統俳句に一礼して選びました。

蓮酒を阿片患者のごとく嘔む

幸一

蓮見舟にて象鼻杯を飲む様をかく書かれた。恐れ入谷の鬼子母神です。象鼻杯は雅語的情緒を持つが、蓮酒と言ひ換えると途端に、猿酒にあらで蓮酒となり、風雅な遊びならで、風狂に近い遊びになる。その微妙な味わいを、阿片患者の如く「飲む」にあらで、「嘔む」としたので、ごくりと喉仏の動く様まで見えてきて、実感を強めた。芭蕉の長い前書を持った発句、「狂句」がらしの身は竹斎に似たる哉」にも遠く通じている吾らの蓮見舟の象鼻杯を阿片患者の如く嘔む。書たきこと多かれど、冗長に過ぎては、この句の味わいに障る。来年も嘔みたいものだ。

一句鑑賞（17号分）

大津絵の鬼の行水梅雨明ける

倉田紀子

啓泰

ユーモラスで明るくあけつびろげですが、下五の「梅雨明ける」で決まりです。庭の木に衣、鉦、太鼓、傘、奉加

帳、最後に虎の皮のものまで掛けての行水が見えて楽しそうですね。この句を読んだ時は大津絵にこの絵柄があると思っていました。落ち着いてみると、作者のものにも束縛されない自由な発想だと解かりました。京阪三井寺駅で下り琵琶湖疎水にそって歩く。桜の葉が色づき、流れにそって京へ登ってゆく。十分も歩くと大津絵の店が見えて来た。兄弟で商っているじんまりした店内に色紙、短冊、掛軸、葉書、木彫りの鬼等が並んでいた。朱、胡粉、黄土、墨を使い力強い線でしかも洒脱な味わいに圧倒された。しかも、今でも二人だけの手書きとのこと。大津絵は寛永年間（400年前）大衆信仰のため神社が描かれ後には一般風俗へと変って行つたというが、今では民画としての高い評価がうれしい。又、韓国にも民画というものがあると聞き、旅したいと思っている。

大津絵の筆の始めは何仏

芭蕉

（7.28受信）

ハガキ句第十八報 (H. 18 / 10 / 11)

汗撥ねる乳房八百秋暑し

孝三

秋風や二歳の孫と観覧車

〃

風に浮き風に迷ひしさるすべり

妙子

木屋の散り敷く砂糖菓子のがやう

〃

消火器の期限はきのふ蚯蚓鳴く

哲也

母はもう電話に出ないあけびの実

〃

ひょうたんにすがりつかれた左の手

まろ

十五夜にちようちん一人あそびゆく

〃

歩くさの釣瓶落としと飛行機雲

高志

十六夜の雲を照らすや菟買ひに

〃

鉄瓶の小包届く無月かな

敏子

日入るに少し間のあり赤のまま

〃

ハガキ句短見 (ハガキ句第十八報)

鉄瓶の小包届く無月かな

飯田孝三
敏子

「小包届く」が心憎い。不思議、「無月」に通う。月は雲の中だが、月光に湯たぎる釜の音が聞こえる。「かな」の胸

懷が深い。野暮な講釈は無用。瞑目して心耳心眼を澄ますべし。

十六夜の雲を照らすや菟買ひに

高志

「いざよひ」の月明が葱の瑞々しさに通い、照応が見事だ。葱は、関東の白葱がいい。切字「や」の撥ねが「買ひに」の弾みを誘い、快調である。蕪村「葱買うて枯木の中を帰りけり」にもかなう。

日入るに少し間のあり赤のまま

敏子

「少し間のあり」が臍。日没の刻々に、過ぎ来し日月が重なり、赤まんまの先に、あれこれの情景が展開する。

母はもう電話に出ないあけびの実

哲也

母上を亡くされたのだろうか。「あけびの実」が悲しく、うつろな心を、まざと映す。さらに、「もう電話に出ない」の平俗、口語詠が悲しみを一層深くする。

歩くさの釣瓶落としと飛行機雲

高志

釣瓶落としと夕焼けの飛行機雲の光景が鮮やかである。「歩くさ」の軽さとの響き合いもいい。が、結「飛行機雲」の体言止めはどうか。例えば、「飛行機雲と」では。そう思ったが、それでは、景が流れ、眼目、茜の飛行機雲のひろがりがとんでしまう。さすれば、出だし「さ」に、なお一考を要するかも知れない。

十五夜にちようちん一人あそびゆく

まろ

十五夜の月明かりに提灯をさげて行く。飄逸。巧まず

面白い。「十五夜」、「一人」の他は、かな書きするあたりも心憎い。

消火器の期限はきのふ蚯蚓鳴く

哲也

消火器記載の有効期限が昨日で切れた。でも、消火剤の効力がとたんに霧散するわけじゃない。「蚯蚓鳴く」は、そこらあたりの、ちぐはぐを衝いたか。着想は面白いが、なにか拵えがのぞく気がする。

お便り広場（到着順、敬称略）

高志さん敏子さんこんにちは。長らく俳句をお休みてごめんなさい。畑と孫に会うことが、今の私の最大の関心事。出来る時に出来ることを!!そう思つて楽しんでます。孫は小さくいらになると、学習塾通い、一歳からヤマ通い。そのようなことを娘夫婦は計画しているようですので、ジジババが動けるうちは今しかないといいう訳(笑)。先日、高志さんの畑がきれいになっているのを見て、「なかなか会えないなあ」と言葉に出しました。(うむうむ)いつも「親切にして下さりありがとうございます。よろしくお願いします。六月七月八、九月の俳誌代二千元を同封します。よろしく願います。」(H. 24. 7. 27しろうみそら)

白金蔭7月号ありがたく拝受しました。句誌として賞禄が出てきましたね。すばらしいことです。益々のご発展を。下町のおぼんも提灯もつての迎え火、送り火も我

が家だけ?隅田川の花火も不景気とあつて低調でした。その中にあつて、益々の充実振り「苦労様です。暑さに充分気をつけて下さい。元気でいます。」

(H. 24. 7. 30小山陽也)

猛暑見舞い申し上げます。「白金蔭」第17号拝受、多謝。8月/15(水)の蓮見舟吟行には参加させていただきます。手賀沼9時30分出舟とありますが、我孫子駅に8時30分頃につけばよろしいのでしょうか!後日にファックスでもよろしのでお知らせ下さい。

軍手嵌め誓子の墓をひた洗ふ 宏之助

(H. 24. 7. 30佐藤宏之助)

暑かつたり涼かつたり、変化の多い夏ですね。会費同封します。古代は十一日届きます?十五日の舟遊びは快適でしょう。皆様の楽しい一日でしょう。

わが家の毒だみ、時折花のついている露草と共に引き抜きますが、大分処理しました。少し腰痛?出て、ここ二日は休んでいます。先日は蜜蜂の大群が枝に密着、夕方には全ていなくなりました。巣をさがしているのだそうですね。目下ためた駄本を虫干しのつもりで開いて眺めています。全くつまらない本ばかり、よくもまあと思つています。皆様の益々の活躍を祈ります。

(H. 24. 8. 10小山陽也)

(おれとお願い)

毎々ながら、蓮見舟吟行ではたいへんお世話になりました。先達、同好の方々も加わり、実に楽しい一日でした。お骨折りを感謝いたします。またまた、手塩にかけられた有機野菜をいただきました。お礼申し上げます。

豇豆さんと土産に妻の誕生日
太陽の色跳ねトマト・ミニトマト

蓮見舟吟行句の一部を次のように推敲しました。作者別の欄には、それぞれ推敲句をのせていただけたら幸いです。

(平、24・08・18 飯田孝三)

受贈誌(八月号)

地球儀の赤き日本敗戦忌

(薊95号)

森下流子

敗戦忌古き軍帽かぶりみる

(〃)

〃

田草取り二十二人の子等共に

(〃)

宗近惣介

激雷の雲の魁転がり来

(彩106号)

平野ひろし

白内障術後秋澄むこんなにも

(〃)

〃

鷹渡る富士の八百襲深まりて

(〃)

〃

蜷の道ばつと泥鰌の泥けむり

(〃)

平山三郎

水底に影を落して蝌蚪浮ぶ

(〃)

篠崎用平

蜻蛉が目玉を搔けり空深し

(雷魚91号)

増田陽一

かんほろい

緩歩類として炎天を渴きつつ (〃)

〃

瓦礫から抜かるる柱水温む (〃)

寺澤一雄

らつきよう漬今年五キロに挑戦す(野火8)

池田啓二

夏蝶や白虎隊士の墓一列 (〃)

菅野孝夫

活断層六月しらじら夜があける(〃)

小澤房子

メーデー終(歌声喫茶燃え直す(あす8月号)

山尾かづひろ

天井逃げし風船特売場 (俳句8月号)

〃

俳窓評論纂

*平成24.6月「管制塔」駿河岳水さんの第四句集が出版された。平成19年から23年までの388句が収録されている。編集子の瞬間把握から左に抽出した。

知床から宮古島まで日本全国を旅をされての作句である。誓子先生晩年の行動にそっくりであるが、敢えてそうされておられるのだろうか。癌闘病句も掲載されておられる。その病を克服されて、岳水流俳句が流露した句集である。別な流儀の俳人が読むと、何でこんな句がいいのか、面白いのかと思われるかも知れないが、誓子先生は、俳句は凝固の詩、ぶつきら棒の棒でよしと言われたと聞く。飛行機が好きで、飛行機を信じ、楽しんでいる飛行雲主宰の岳水さん。ヒョーキ俳句の振興は、天

狼俳句精神を受け継ぐ一つの道であると、堂々と書かれてある。喝采。

死後となる羅宇屋赤帽昭和の日

田を植ゑる賢治の詩碑の際にまで

登山者が乗る空港の動く道

秋の空航く瀬戸内は多島海

教会の鐘に目覚むるながさき忌

ナプキンを立て鋤焼の予約席

ぶらんこに雪つむ志村喬の忌

忠七めし暮春の小川町に食ぶ

波乗りす良寛生家前の海

デパートの地下にパン選る夏初め

新橋駅前の古書市梅雨晴間

タッチ・アンド・ゴー訓練機盛夏飛ぶ

駅弁に林檎一切れ五能線

膝に置く鯛焼ぬくし荒川線

シャッター街凍て国滅ぶかも知れず

初珈琲神田書肆街裏の路地

手摺冷え下りる避難の外階段（3・11東日本大震災）

煌々と灯す夜業の格納庫

＊平成24. 5月「行雲」森下流子さんの第四句集が出版された。平成22年から24年までの主宰誌「薊」に発表された390句全てを集録したものであるとか。連作句ばかり

り26シリーズを載せている。「行雲」は「行雲流水」から拝借された。連作句の紹介は後述するとして、流子さんの現在の「かるみ」の如き心境が、あとがき、にあるので、左に抜書きしました。

「卒寿を既に過ぎている現在、生かされていることさえ奇跡と思っている。万分の一も生還することは無いと信じ、南溟の果てに戦った日々も、今にして振り返れば、海に漂っていた二十数時間を含め、悪戦苦闘のすべてが忘却の彼方へ消え去って、今はただ穏やかな碧い海と、椰子の葉茂る島々、そして齒の白さが魅力的な現地の人々の笑顔が浮んでくる。」

親鸞聖人七百五十回忌法要（2012. 5.3～5.5）

み佛に近き枝より花開く

花散つて参道白き道となる

花冷の畳に吾も一信徒

親鸞忌僧の読経に吾も和す

若葉風稚児行列に蹤いて来し

春光に稚児の衣装を眩しめり

行列に蹤き白足袋を汚したり

水郷めぐり（近江八幡市）

遊船の床花柄の小座布団

菅笠の船頭時に京なまり
菅笠の船頭時に京なまり

湖水より青鷺翔てり水の綺麗
夫婦鳩舟の気配に潜りたり
青葦の茂る水路の迷路めく

鵜飼舟

鵜篝の風に煽られ火屑散る

鵜篝の等間隔に近づき来

舷を叩き疲れ鵜勵ませり

鵜篝の消へし川面にホテルの灯

鵜飼果て山黒々と横たはる

鵜篝の上に灯さる城に月（高志）

鵜篝は紅く水銀灯青し（〃）

＊陽一さんの「タイ国北部山地蝶紀行（3）」が雷魚91号に掲載された。タイ山地での蝶採集の本番の紀行文。三月十九日の記録だ。チエンダオ山の登り口まで来て、無数の蝶が乱舞しているのに出あう。アオスズアゲハ、モンタイマイの他無数の黄蝶、ルリマダラ類や、コムラサキ類も出現する。ベニモンアゲハが来る。キシダアゲハが高く迅速に飛んでいく。ツمامラサキアゲハも良く飛ぶ。このひの紫は気が遠くなる美しさである。♀は白っぽく見える。こ

の種はひが♀をぶらさげて飛ぶので、網を翳して追いかけてもひは必死に羽ばたいているが、♀が尻尾で繋がって逆様にぶら下り、異様なものが飛んでいるように見える（つく）：打ち込んでみると、陽一さんの行動が見えてきて、私も一緒に蝶を採集している気分になります。

エッセイ

日本と台湾

飯田孝三

「日本一高い山は（一）」

七十年以上も昔の話である。小学一年生の教室で、担任の若い女の先生が生徒に質問した。紀元二千六百年が祝われた、昭和十五年の初め頃だったと思う。「日本で一番高い山は」、「ハイ、ハイ」、「ハイ、富士山です。」「いいえ」、「ハイ、新高山です」、「そうですね、新高山です。」「では、新高山はどこにありますか」、「ハイ、台湾です。」「そのとおり、台湾です。」「センセ、富士山は？」、「そうですね、一番きれいな山と聞かれたら、富士山」。きつと、「何々の日本」はの授業だったのだろう。その前後の記憶は全くないが、なぜかこの場面だけは鮮明に覚えている。当時、正面の教壇の壁には、大きな日本地図が貼られ、北海道、本州、四国、九州、沖縄、台湾、朝鮮半島が赤く塗られ、朝鮮と接する満州が黄色だった。その頃、東京近在には朝鮮出身の人も住み、中学の友達もいた。

台湾からの人はいなかったが、仕事で台湾に往き来している知人もいて、ごく当然に、みんな同胞だと思っていた。それが、敗戦の日を境に、互いに他国人になつてしまつたのである。朝鮮出身のある先生は、暫くして、北朝鮮に歸られた。国の歴史が教科に入る五、六年(既に「国民学校」といつていた)になると、次第に戦局が緊迫し(後に知つたのだが)、教室の授業が減り、ついには殆どなくなつた。上級生は出征兵士の家の田畑の手伝いや道路端の草刈りなどの勤勞奉仕が授業にとつて替つたのである。だから、日本と旧同胞国との関わりや、それぞれの国の歴史について識つたのは、殆ど戦後だつた。新高山が今は玉山と呼ばれるのを知つたのはずっと後である。

(H. 24. 5. 30)

芭蕉のかるみ以後 (11)

光成高志

貝おほひ」の式拾番。

左勝

鹿をしもうたばや小野が手鉄砲

政輝

右

女をと鹿や毛に毛がそろふて毛むつかし

宗房

左の発句。小野と。いふより。鹿と。つづけられ侍るは。かの紫のしななもの。ひかる。お源の物語にも。小野に鹿のけしきを。書つらね侍りしより。尤能とりあはされた

る成べし。そのうをのがてうづぼうと。いふを。とりなされたる。鉄砲のすの。口がしく打出されたる。玉の句ともいふべければ。火縄のひごんを。打べきやうもなし。右の女夫鹿くはしく論を。せんも。毛むつかしければ。あぶなき。筒先。足ばやに。逃のき侍りぬ。

左の句の小野という地名から鹿と続けたのは、かの紫という粹な女が書いた「光お源」物語にも、小野に鹿の景色が書き連ねられているから、まことに良く取り合わされたものです。その上に、「をのがてうづぼう」という言葉を「己が手鉄砲」に取りなしたのは、鉄砲の寸の口から口がしく、打ち出されたのは、玉の句ともいふべき句だから、火縄の火に批判の言葉を打ちだすべきもない。右の句の夫婦鹿を詳しく論ずるのは、毛むずかしいので、危ない筒先から足速に逃げ去ります。

小野に己と言いかけており、また、「おのがてうづぼう」は当時のはやり言葉である。「言いたい放題を言う」という意味らしい。「己が」は、相手を卑しめていう時に使う「おのれ」の意味である。この句には、言いたい放題を言う「おのがてうづぼう」と云う言葉を「小野が手鉄砲」と表記し、「小野」に「己」を言いかけた技巧が凝らされている。「かのしなものは」「かの紫という粹な女」の意味で、紫式部を指している。「しなものは」、婀娜なる女という当時ののはやり言葉であるが、紫式部が、雨夜の品定めで、

婀娜なる女とまめなる女という対比で書いている、あの
婀娜なる女を云うのである。江戸時代にはかなり卑俗
な言葉に成り下がっていたのであろう。紫式部を粹な江
戸の町娘のように言いなしたので、「源氏物語」を「ひかる
お源の物語」と書いて、光源氏も「ひかるお源」という町
娘に仕立てたのである。「小野に鹿のけしきを」の所も、
夕霧の「里遠み小野の篠原わけて来てわれもしかこそ声
も惜しまね」の歌を踏まえて、小野と鹿とが縁語になっ
ているのを使った。芭蕉はかなり源氏に精通していたと見
てよい。右の作者の宗房は芭蕉の俳号であるが、自作につ
いては、毛むつかしいので、鉄砲の筒先が危ない危ないと
逃げ去りますとしやれを効かせて論評を避けた。愉快
な若き芭蕉が彷彿として甦るではないか。若きと言えど
も、もう29歳の芭蕉の江戸に下る年の処女作が「貝おほ
ひ」であった。それまでに猛烈に勉強したのであろう若き芭
蕉を、私の想像力でもって再現したい欲求に駆られてい
る。

我孫子日記

7/20例会。7/24*スカイツリー水族館。7/28*
*千葉ユータウン電機大。8/1佐久平馬事公苑。8/
2***福王寺↓茂田井宿↓望月宿。8/9中村橋水彩
画展。8/15例会(蓮見舟)。

*罫立てば真一文字の口見ゆる

高志

**尺取の斜に突つ立つその力

”

***鼻の穴ひとつの土偶熱帯夜

みち

甲冑に迎えられたる夏座敷

”

信州の青田青山能登瓦

高志

夏の庫裏喝の一字のカレンダー

”

原稿募集

句会報の中から二句一句選び鑑賞文を発行所ま
で、ハガキかメールにてお届けください。俳句特別作品は
十句、評論、エッセイなど、又は季語に纏わる生活逸事な
どを書いてお寄せ下さい。当分十六頁中綴じ製本型で編
集します。多ければストックして順次掲載します。

編集後記

終戦記念日、お盆の蓮見舟吟行は、残暑和らいだ日にな
り助かりました。松村幸一さんのお出ましがあり、新し
い句に接して、継続は力なりを実感しました。東京へも出
て新しい試みをしようと思います。孝三さんのエッセイは、
連載します。ご期待下さい。

誓子俳句翻訳（４） Seishi Yamaguchi(1993)より転載

ひぐらしが 鳴く奥能登の ゆきどまり

A clear cicada

calling at the very end

of outer Noto.

Composed 1961.

When I went to Rokko Point ,on the Noto Peninsula, I heard a clear-toned cicada singing in a tree. It was at the very end of the Noto Peninsula. The cicada was singing out, protecting the place.



白金菫 第 18 号 平成 24 年 8 月発行

表紙の題字:嘉悦羊三。写真は白金菫

編集・発行人 光成高志(FAX 04-7187-1068)

発行所〒270-1119 我孫子市南新木2-14-17

＊＊上の水彩画:伊藤一艸人。右のトマト:しろみそら

